UDLM

7

vol.295

July 31th
2020

生身の都市に掴まれて

p.2-3　浦安 PJ 7 年間の歩み
p.4-5　歴代 PJ メンバー、それぞれの思い
p.6-7　コロナ禍での PJ 活動と再開に向けての動き
p.8　PJ メンバー、生の声

URBAN DESIGN LAB. MAGAZINE

浦安プロジェクト 7 年間の歩み

浦安プロジェクト (以下、浦安 PJ) は 2014 年 4 月から始動した。現地調査、文献調査、インタビュー調査などを行い、元町らしさとはなにか、元町はどこに向かっていくのかを我々なりに考えてきた。

そして今年度、私たちは浦安 PJ に一度区切りをつけることとした。本稿では浦安 PJ のこれまでのあゆみを振り返り、その成果を確かめてみたい。

対象地　浦安元町

浦安元町は千葉県浦安市の境川沿いのエリア。1971 年の漁業権放棄までは漁村集落だった。地域の人々が通る道路と個人の庭が一体となった「ミチニワ」が特徴的。現在は東西線開通をきっかけにベッドタウン化する中、木造密集地帯であるため防災上の課題があり、区画整理が進められている。

2014

4 月：キックオフミーティング

市役所ヒアリング

6 月：現地空間調査

徒歩＋自転車で浦安市内を探索。

7 月：郷土資料館学芸員ヒアリング

8 月：現地調査・住民ヒアリング

路地や、銭湯や住居などの古くから残る建築物の現況を記録。
ヒアリングでは漁師町時代の暮らしやコミュニティの変遷を調査した。

10 月：路地空間調査

路地へのあふれ出しの様子を記録。

11 月：事例調査（神戸市・駒ヶ林）

他地域での区画整理事例を調査。

12 月：まちづくり講演会での発表

住民と共に浦安の今後のまちづくりを考える講演会を市が主催した。そこで PJ チームは「地域資源として住み継いでいく元町」と題し、調査結果の中間発表を行った。元町の歴史的変遷や路地のあふれ出しについて、資源と防災の 2 つの視点から分析、説明した。

2015

6 月：オムニバス演習開始

「浦安元町における非日常（防災）と日常（暮らし）を統合するデザイン提案」と題した学部 4 年生の演習課題の中で、元町を敷地とした具体的な設計提案を模索。

7 月：オムニバス演習現地発表

住民とのワークショップや市役所の方との意見交換会において、演習を通じた設計提案を発表。実現に向けた検討ではなく、元町の未来を構想するためのアイデアを強く打ち出した。

2016

6 月：浦安三社祭での空地活用実態調査

4 年に一度行われる浦安三社祭に際して、空地が神酒所として用いられる点に注目し、非日常的な空地の利用・ポテンシャルに関する示唆を得ようと考え、各神酒所の位置や形態、滞在人数などの観点から、事前・当日と 2 回のフィールドワークを行った。

◀▲神社の神酒所とその分布。空地が利用されている。

6 月：まちづくりコンセプトブック作成開始

元町でのまちづくりを盛り上げていくため、2014 年からの研究成果を住民向けに紹介する冊子を作成開始。推敲を重ね、2017 年 3 月に正式に発行された。

研究成果はこちらをチェック！

住総研論文（2016）

窪田亜矢，田中大朗，池田晃一，森川千裕，李美沙，& 砂塚大河．(2016). 漁村から住宅地に変容しつつある浦安において継承すべき住文化．住総研研究論文集，42, 97-108.

木造密集市街地である浦安元町の課題と地域特性を分析。市有地を空地としたまま活用することで，リスクを軽減しつつ，ガワ・アンやロジという空間構造とそれに依る住文化を継承できる可能性を指摘した。

よみとき浦安元町（2017）

浦安元町を祭り・なりたち・現在から読み解き、未来を構想する「まちづくりコンセプトブック」。元町でのまちづくりを盛り上げるため、住民の方をターゲットに作成された。

浦安魚市場のこと「浦安魚市場と浦安の歴史」（2019）　※寄稿

浦安で 60 年以上もの間親しまれていた浦安魚市場が 2019 年 3 月末に閉場。魚市場の記録を残すため、写真資料やインタビュー記事を収録した書籍に、PJ チームが浦安魚市場と浦安の歴史に関するテキストを寄稿した。

浦安空地図鑑（2020）

浦安の空地に着目し、周辺環境や形態に応じて類型化。各類型ごとの空地の現在の図面や、ヒアリングから窺った住民による活用の様子を記録している。

2017

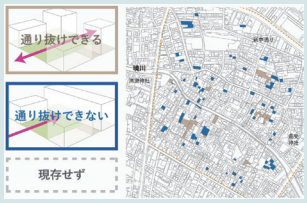
6 月：市長へのプレゼンテーション

内田悦嗣新浦安市長を訪れ、「よみとき浦安元町」の贈呈を行った。

8 月：浦安市＋マヌ都市建築研究所プロジェクトミーティング

9 月：空き家・空き地悉皆調査

“アン” の部分に小さな空地が連担して発生していること、駐車場・防災倉庫・洗濯物の干し場など、多様な使われ方がされていることが明らかになった。



▼

11 月：住民勉強会での発表

浦安市主催の「防災まちづくり勉強会　総合ガイダンス」に出席。「地区の特性を活かした防災まちづくりの考え方」と題し、住民が防災まちづくりを考える際のヒントとして、よそ者なりの視点から見た元町の魅力や課題をプレゼンした。その後の WS では住民と防災に向けた意見交換を行った。

2018

5 月：浦安市都市計画課との打合せ

6 月：浦安市郷土資料館ヒアリング

8 月：展示会「浦安元町の風景を考える－今と昔の橋渡し－」開催

これまでの調査や各人の研究成果を元町のギャラリーにて展示。訪れた方々と地図を囲みながら今と昔のまちの記憶や、まちについて思うことを伺った。
まちづくりに関心のある住民と知り合う。

9-10 月：地域住民へのヒアリング

展示会で得たつながりから、地域でお店を営む方やイベント等の活動をしている方のお話を伺う。

11 月：魚市場閉場に伴う記録調査

1953 年から続いた浦安魚市場が閉場。住民の方も交え各店舗のインタビュー、実測調査などを実施、市場内で展示を行う。
生業の漁業権放棄後も存続した魚市場の終わりに際し、「市場」の存在の意味を考える機会となった。

2019

5 月：百縁商店街への出展

浦安魚市場に関する調査成果を展示。「浦安魚市場のこと」のクラウドファンディングも行われた。

6 月：空地形態調査

浦安元町に数多く残っている空地がどのような性質を持っているのか、形態や周辺状況を調査、クラスター分析を利用して類型化した。

10 月：展示会「浦安元町の風景を考える－空き地にあふれる暮らし－」開催

空地の類型ごとの特徴を展示。空地の模型に添景を置いてもらうミニ WS も開催し、類型に応じた空地の活用可能性を住民に向けて発信した。

11 月：空地利用現況調査

市街地が変わりゆく中で、現在の空地へのあふれ出しの実態を図面に記録。

▼

12 月：空地図鑑作成開始

路地や空地に生活がにじみだしている浦安の姿を漁師町時代からの文化と捉え、その現在を記録するため空地図鑑を作成することに。

2020

6 月：空地図鑑編集

2019 年度の調査をもとに図面の作成や、冊子の編集作業を続行。

2020 年秋頃発行予定 !!!

歴代プロジェクトメンバー、それぞれの思い

2014 年から始まった浦安 PJ は取り巻く状況の変化と共に、その取組みを変化させてきた。PJ はどこに向かうべきか、悩みの多い PJ だったと言えるかもしれない。歴代メンバーにお集まりいただき、それぞれの代の浦安への向き合い方や苦悩をお話しいただいた。

開催日程　2020 年 7 月 19 日（日）17：00 ～ 18：00
話し手　李、森川、砂塚、伊藤、永門、前山、安藤、堀籠（敬称略）
聞き手　應武

▲ PJ 年表を見ながら、歴代メンバーでこれまでの動きを振り返りました

－各年度の振り返りをしながら、皆さんのお話を伺っていきたいと思います。ではまず、2014 年に PJ はどのように始まりましたか？

李　浦安市の方と一緒に調査して提案するところから始まりました。元町は密集市街地で漁村でした。空地がどんどん出てきた一方で、行政が介入して何かするということができていなかったようです。

－市の方から窪田先生にこのまちを調査しようと話が来た、と。

李・森川　そうだと思います。浦安のことは全然知りませんでしたが、市の方にお会いして、現地を案内していただきました。

> 2017 年度はまだ市の方と一緒にやろうという感じでしたね。その後は、まちの人と接点を持てないかという風に方向性を転換しました。

－今は市の方と何かするわけではないんですよね……。PJ の進め方は結構変わっていますよね。

永門　2017 年度はまだ市の方と一緒にやろうという感じでしたね。11 月には浦安市主催の勉強会に参加させていただきました。その後は、まちの人と接点を持てないかという風に方向性を転換しました。

森川　PJ を始めてすぐの頃から、まちの人と接点を持ちたいというのはありました。李さんがヒアリングで現地の方と仲良くなってましたね（笑）

李　現地調査は楽しかったです！

－砂塚さんはどの時期に参加されていましたか？

砂塚　2015 年から、PJ メンバーは私 1 人でした。そんな自分が夏以降に海外インターンで大学を離れることになりまして、PJ を一旦おやすみしますか、と窪田先生から打診がありました。その時、学部 4 年夏学期のオムニバス演習で浦安をとりあげることになったんですよね。私は演習の TA としてアドバイスをしていました。自分自身がサーベイをあまり出来なかったので後悔しています。

－ PJ 以外にも学生の間に挑戦したいことはありますし、個人のやりたいことと PJ 運営の兼ね合いは常に悩みどころですよね……。

－年表（※ p.2-3 参照）を作っているとき、2016 年発行の読み解き本が PJ 前半の区切りになっているように感じました。PJ 開始当初から本にまとめようという計画があったのですか？

李　それは話していなかったかも。

森　論文にする話はあったね。調べたことを何かにまとめて残そうという窪田先生のご提案で住総研の論文を書いた記憶があります。この場には参加されていませんが、都市デザイン研究室 OB の池田さん、田中さんが論文とか読み解き本とかはぐいぐい引っ張ってらっしゃいました。

> 大学の立場で市の事業に参加していく際の上手い立ち位置が見つからなかった

－読み解き本作成後、PJ をどうつなげていこうかという議論はありましたか？

永門　発行直後の 2017 年はまだ市の方と一緒に活動させていただいていたのですが、その後は活動に限界を感じ始めました。
　そこで、地域の方々にお話を伺いながら新たな進め方を考えたいと思うようになりました。私自身の修論でも浦安を対象地にしていたこともあり、地域の方々と接点を持っていかねばと感じていたこともあります。

－市と活動を進める上で具体的にどのような限界を感じたのですか？

伊藤　2018 年頃に市がより主導的にまちづくりを動かしていくことになって、大学の立場で市の事業に参加していく際の上手い立ち位置が見つからなかったんですよね。

永門　個人的な感触では、PJ チーム側は大学という立場上、まちの成り立ちや今に残る生活景などの地域資源の話が中心になるのですが、それを前面に押し出していくと、議論に関わっていくのが難しかったです。

－木造密集市街地の防災という観点から区画整理を進める上で、マッチしないところが出てきたということですかね。

永門　事業を進めていく上で、という話となると意味のある視点をどれだけ出せたんだろう……
　2018 年からは行政と一緒にやること以外の地域への入り方があるのでは、と思ったんですよね。その結果が年表に出ている。行政と組むのも住民と組むのもどちらも大変です。その中でどちらの方が意味のあることができるのか、ということが悩みどころでした。

伊藤　PJ はもともと市の景観審議会との関わりから始まったのですが、話題が景観から防災問題が避けて通れないと変わっていったんですよね。その頃から、景観や地域資源の延長で防災を考えたい学生達と防災を重視して進めたい人達の間で齟齬が生まれてしまった気がします。

－景観と防災の葛藤は普遍的な都市計画の問題だと思いますが、住民の方や行政の方は、その辺りどういったお考えを持っていましたか？

永門　結構個人差がありましたね。防災も大事だけど今の景色が無くなるのも違うよねという人もいましたし、その逆の人もいました。

伊藤　区画整理で綺麗になったところに対する意見は綺麗に分かれるなという印象です。こうなると大学として上手くアプローチできませんでした。

永門　住民ひとりひとりと関係性を構築して、責任を持って事業を進められる主体はやっぱり行政だなぁと思います。

伊藤　PJ として動けないねこれ、と 2017 年 11 月～ 2018 年 8 月は立ち止まってしまいました。
　一方でこの時期に卒論を書いて、住民との関係を安藤さんが独自で築いていたんですよね。

安藤　2017 年の 9,10 月から PJ に参加するようになりました。卒論で浦安を扱っていたのがきっかけです。

－そんな中、住民の方とのつながりが持てたのは 2018 年の展示会がきっかけになったんですよね。

伊藤　ギャラリーの方がその場所で 30 年ぐらいギャラリーを運営している方で、本来はまちづくりの展示会をする場所ではないのですが、温かく迎えてくださいました。展示会ではこれまでアプローチしてこなかった自治会の方にもお会いすることができました。

永門　展示会の前はどういう人がまちにいて、どういう人となら今後のまちづくりの話ができるのか分からなかったんですが、その後のつながりの上で大事な方に出会えた重要な会でしたね。例えば、展示会に来てくれた方の中に、我々に世代が近くて地域のまちづくりに興味のある方がいらっしゃったのですが、そのつながりで調査が進めやすくなりました。

▲ 2018 年に行った展示会の宣伝ポスター

まちの魅力を住民の方はあまり認識していないんじゃないかな。それを外の人間が伝えていくことは大事

－住民に対してまちをどうしましょうか、と投げかける機会は行政と組んでいた頃もあったと思いますが、そこではどんな感触でした？

李　発表会などをしても災害があったわけではない日常の中で、このまちをどうにかしないと、という意識の人ばかりではありませんでした。2018 年の住民の方々とつながれた会は意義のあることだなと思いますが、災害など何かきっかけが無い中で、このまちを変えていこうという雰囲気をつくるのは難しいことだと感じます。

森　あとは、そこに住んでいる人にこの場所すごい素敵ですよねと言ってもそうなの？という感触でした。昔からこれだからねえという感じ。魅力を住民の方はあまり認識していないんじゃないかな。
　それを外の人間が伝えていく、形に残していくことは大事だと思います。地域の中にも、活動を独自でしている方がいるので、そういったキーパーソンに上手くアプローチできればよかったかもしれないですね。そういうとき、会社の人間が来ると仕事なの？となってしまうので、外の人間でもフラットにまちの中に入っていけるのは学生の特権です。

－変わっていくまちに対して、どう未来に向けてアプローチするのかが難しいと思います。記録調査は重要ですが、その次にどうするのか。2019 年はそこで路頭に迷いました。我々は外の人間ですから地域資源をまちの方に伝えることは出来ても、それを担う主体にはなれません。そこでやはりキーパーソンとのつながりが重要になるのでしょうが、それも上手く活かせませんでした。つながりをつくってくださった先輩方には申し訳ないばかりです。

堀籠　2019 の展示会の時に空地の模型に添景を住民の方に配置してもらい、どうやって使うかをイメージしてもらったのですが、空地を使っていたおばあちゃんでも、うーんとなってしまったんですよね。

前山　2019 年度、下の代を入れるかどうかは議論がありました。でも、2018 年までに若干地域の人と繋がることもできたのに、やめてしまっていいものかと思って新メンバーを入れることにしました。調査の方に力を注げばよかったが、中途半端な感じになってしまいましたね。

安藤　空地の活用が現実的なのかについては疑問を持っていました。でも、それを近所同士で許容することが浦安のいいところだとも思います。
　個人的には、浦安の本町が元々そういうポテンシャルのあるまちだったことを新規住民の方含めて、まちの方々に伝えればよかったと思います。

地域の方々とうまく繋がりつつ、大学として持っているハード面の専門性や関心を活かしていければ、私たちなりの視点で貢献していけるのではないかと思います。

－結局答えは出ずに、外の人間だけでは今の浦安の風景を記録して残すくらいしかできないんじゃないか。そう考えて、2019 年度は今の浦安の姿を図鑑のようにまとめようと決めました。
「地域資源にどのように現代的な意味を見出し、次のデザインに活かして実現していくか」が浦安プロジェクトのテーマだと思っているのですが、その際、大学はどうすれば良いと思いますか？

伊藤　積み上げてきた調査を、どうしようで終わってしまいましたね。展示会ではとりあえず住民にお話ししようと思いましたが、「で、どうしたいの？」と聞かれた時に答えに詰まることがありました。「こうなるといいよね～」ではなく、そこから先、具体的に何をしたいかを考えることができなかった。だから住民の方と話していても「そうなんだ！おもしろいね、懐かしいね」で以上のものにするのが難しかった。
　大学ができることは、調査研究が第一義です。その先で何ができるかを考えることは難しかったように思います。

永門　学生がやるような建築都市計画寄りのまちの見方は我々の専門性です。それを地域の人は持っていないので、展示会ではその視点を面白いねと言ってもらえますし、それ自体には意味があります。
　ただ、当たり前のことですが地域でのつながりは学生より地域の方々の方が何百倍も持っていることも実感しています。地域の方々とうまく繋がりつつ、大学として持っているハード面の専門性や関心を活かしていければ、私たちなりの視点で貢献していけるのではないかと思います。

－個人的には路頭に迷ったというのも良い経験でした。外の人間として、学生としてまちに対し何が出来て何が出来ないのかを見つめることになりましたが、都市へのアプローチの方法を学ぶことができました。
**　本日はありがとうございました。**

浦安 PJ　担当教員

地域デザイン研究室　教授

窪田亜矢 先生

私たちは、外の研究者チームとして、研究して成果を地元に還元する

現場があるということは、現場の事情があるということだ。市役所は、浦安元町の魅力を守りたいという思いと、不燃化・道路拡幅等の事業を進めたいという思いを、両立させて形にしたいと考えていた。そうした微妙な時期でもあったため、私たちは、外の研究者チームとして、研究して成果を地元に還元することを重視した。毎夏、元町のギャラリーをお借りして、展示やブックレットによって私たちの理解する浦安の姿をお伝えした。お付き合いは広がり、地元の子供が主体となるまちづくりや古刹での魚市場の思い出イベントへの参加等、豊かに展開している。アカデミックな査読成果も実った。永門航「大都市近郊旧漁師町の産業構造転換・都市化に伴う地域変容に関する研究」建築学会、永門航「大都市近郊旧漁師町における空間構造変容と土地所有動態に関する研究」都市計画学会、安藤理沙「現代公共空間の私的利用にみる生活空間の共用に関する地域特性の継承」実践政策学等。

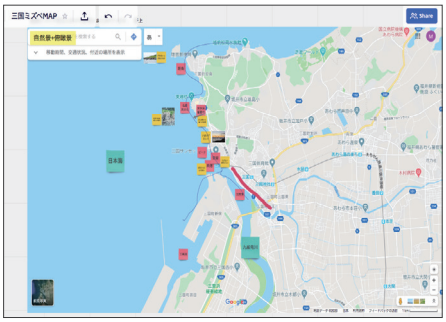
コロナ禍でのプロジェクト活動と再開に向けての動き

COVID-19 によって、各プロジェクトは、活動の中止や延期、オンラインでの実施への転換など、大きな影響を受けた。4 月号では、各 PJ の活動状況について紹介した。その後、4 月から 7 月までの活動をまとめた上で、各 PJ の活動がオンライン化によってどのように展開してきたかを PJ 参加者にアンケートによって尋ねた。また、東大活動自粛レベルの緩和を踏まえて、各 PJ 再開の動きも見られている。

01 富士吉田 PJ Fujiyoshida Project

①まちの将来ビジョンの取りまとめと、②オンラインイベントの開催をした。①はもともと今年度取り組むことが予定されており、文献調査をベースに進めている。②は COVID-19 拡大をきっかけとした新たな取り組みである。「よこまちポスト」を活用する予定だったが、直接人を集めることが難しくなった。（特に、「吉田の火祭り」が中止された影響で、それが予定されていた 8 月末より前に、現地でイベントを開催することが難しくなった。）そこで、これまで勉強会等に参加できなかった層を巻き込もうと、オンラインイベントを企画している。また、6 月末に今年度初めての現地訪問をし、修士 1 年生は現地の雰囲気を掴んだ上で文献調査等に取り組めるようになった。今後も①と②を進め、夏休み中に現地で将来ビジョンについて地域の方と議論する場を設けたいと思っている。　（M2　宗野）

02 三国 PJ Mikuni Project



①エリア全体の将来ビジョンの検討と②地元高校に対するミニ授業をした。また、これまでミーティングは東京都市大学で行なっていたが、現在は全てオンラインで実施している。①はもともと取り組むべきタイミングが来ていたが、COVID-19 拡大で現地訪問が難しくなったことが後押しして、現在の活動の中核となっている。②は現地に赴いて直接授業をする予定であったが、地元高校の各クラスと ZOOM でつなぎ、スライドを画面共有してミニレクチャーを行った。今後、夏休み中に今年度初めての現地訪問をする予定である。地元の大学の学生と顔合わせをした上で、彼らと協働し、昨年度から取り組んでいるまちなか回遊サイン計画を発展させていく予定である。（M2　宗野）

03 宇治 PJ Uji Project

今年度新たに始動した宇治 PJ ですが、その矢先の COVID-19 ということで、メンバー全員が現地を訪れることができないまま、お互いにリアルで会うこともないまま、ゆるっと始まってしまった印象があります。ただこの現状に嘆いていても仕方がないので、それを逆手にとって「現地を実際に見る前のニュートラルな視点」で文献に当たり、「宇治の生活文化」なるものを調査してみるということを行ってきました。大学の活動制限レベルが下がり、8 月に現地に行くことがようやくできるようになったので、ここまでの文献調査をもとに仮説を立て、実際に宇治ではどのような暮らしが展開されているのかをこの目で確かめ研究していきたいと思います。　（M1　河崎）

04 本郷 PJ Hongo Project

「本郷のキオクの未来」は、東京文化資源会議の中のプロジェクトとして、本郷地域の様々な文化資源を守り、活かすために活動しています。4 月に都市デザイン研究室のプロジェクト報告会で本プロジェクトについて発表させていただいたところ、修士生をはじめとする 7 名ほどのメンバーに新しく参加してもらっています。しかし、COVID-19 の影響で実際に会えないままの状況が続き、準備していた 7/24 のイベントも中止になってしまいました。現在のところ、月 1 回の Zoom 定例会を重ねながら、COVID-19 の影響下にある本郷のまちの様子を記録しようとしています。早く実際の街に繰り出したいと願っています。　（D3　三文字）

私は新 M1 の留学生であるが、３月に一時帰国した後、日本に戻れなくなってしまった。その状況でPJ活動を進めるにあたり、オンラインでメンバーと交流し、文献調査を通じて現地への理解を深める試みをした。しかし、日本のまちや文化に詳しくない外国人にとって、文献と電子マップだけで現地を理解することは大変難しいと感じた。現地を訪ねたことがないため、まちへの理解が平面的になってしまい、リアルに捉えることができないと常々痛感している。

05 上野 PJ
Ueno Project

上野 PJ ではこのような状況下においても、月一度のアーツ＆スナック実行委員会で現地の方々のお話を聞いたり、6 月には東京都市大のトーキョートラムタウン構想とのイベントを行ったりなど、オンライン環境をうまく使って活動しています。一方で、新メンバーとして今年から入った身としては、やはり現地に行けないためなのか、スナックや歓楽街といった空間に対して想像が及ばず、また夜の町が敏感に取り沙汰される世の中で、その夜の町に切り込んでいくことの難しさを感じています。現在は路上占用基準の緩和を受け、「ガイトウスタンド」というストリート活用や、文化発信としての「オンライン朗読スナック」といった今の状況を利用した活動を行っています。　（M1　河崎）

06 小高 PJ
Odaka Project

4 月からまちなか菜園講習会を行う予定でしたが、COVID-19 を受け、中止を余儀なくされました。現地に行けない中、それまでに蓄積してきたヒアリングデータをもとに議論を深めることで、俯瞰的にまちを捉える機会を得られたのは実りがあったと言えます。7 月ごろから現地に行けるようになり、新たなスタートを切りました。まちなか菜園プロジェクトの推進やデザインセンターのリニューアルなど、変わりゆくまちに応じて「復興」の次の「まちづくり」を考えていきます。一方で、感染リスクと共にプロジェクトを進める難しさは今も残ったままです。現地への関わり方のバリエーションを増やす必要性をひしひしと感じています。　（M2　應武）

07 手賀沼 PJ
Teganuma Project

手賀沼 PJ では毎週金曜日に定例のミーティングを設定し、手賀沼フィッシングセンターとその周辺の今後の方針を定める『マスターコンセプト』の策定とヌマベの活用に向けた社会実験『テガヌマウィークエンド vol.3』の開催に向けて議論をしてきました。さらに、隔週で外部の方も交えたミーティングも行い、充実した議論を重ねられてきたと感じます。

制限が緩和された 7 月中旬には 2 隊に分かれて 4 か月ぶりに現地調査を行いました。新メンバーにとっては現地を初めて訪れる機会で、手賀沼周辺の各種スポットも訪れながらの一日がかりの調査で肉体的にも大変でしたが、天候にも恵まれ充実した調査になり、場所のイメージとモチベーションを回復することができました。　（M2　佐鳥）

08 高島平 PJ
Takashimadaira Project

高島平 PJ では、4 月以降コロナの影響で昨年から定期的に継続していた地域住民の方々との「自主管理歩道活用に向けた議論」を行うことが出来ませんでした。そこで、オンラインで地域の方、PJ メンバーで二回に渡り、コロナによって高島平での暮らしがどのように変化したか等をヒアリングし、その上で自主管理歩道活用に向けた議論を行いました。

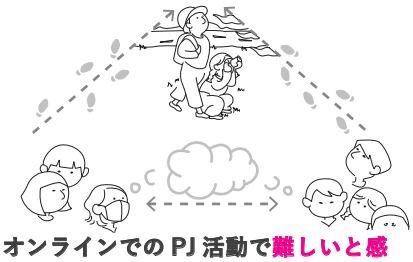
7 月に大学のレベルが下がり、数か月ぶりの現地まちあるきを学生メンバーのみで行い、今後の PJ 活動に向けた下調べを行うとともに、新メンバーは初の現地訪問となりました。また、実践対象となる商店街の商店会長や町会長さんへのインタビューも少人数で行いました。

これらの蓄積をもとに、今後はコロナと社会の様子を見ながら、地域住民の方々とともに年度末・来年度の空間活用社会実験に向けた議論を進める予定です。　（M2　松本）

PJ メンバー、生の声

PJ 活動のオンライン化で感じたことを PJ メンバーに伺った。是非皆さんの生の声を聞いてみてください！

Q1



オンラインでの PJ 活動で難しいと感じた点は何ですか？

「現地に行けない」という回答が多く見られた。
現地に行くことができなかったため、M2 のメンバーは後輩への説明がしづらい、M1 の新メンバーは現地に対するイメージを抱きづらい等と答えた。

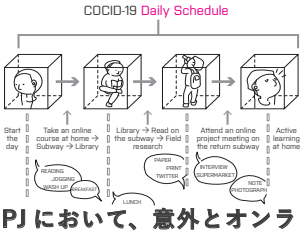
- 以前がわからないのですが、PJ 自体の方向性が見え難かったり、何よりも現地に行けないのが空中戦のような感じがした。
- 雑談（ブレストの一歩手前）

- 新メンバーの修士 1 年生と、直接会ったことがないままオンラインでミーティングをしていたので、初めはやりとりがしにくかった。
また、新入生が現地を見ないままプロジェクトに臨むのは難しそうだと感じた。

- 先輩との距離感の取り方：新しく PJ に参加した際に、すでに参加されている先輩との距離感というか空気感を共有することが難しい。
- 地域の空間や人との関係の構築：現地に行けない中で、実際の地域の空間のイメージが完全には描けなかったり、地域の方々との関係性を構築するのが難しかったりした。

- 勉強会やイベントなどを現地でできなくなったこと。プロジェクトでは現地での活動がメインだったので、それができなくなるのは厳しい。

Q2



PJ において、意外とオンラインでも良かった点などはありますか？

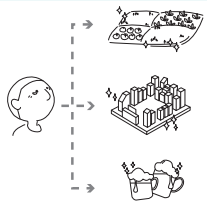
オンライン PJ でも意外とスームズに進められたことは、「ミーティング」を巡る回答が多く見られた。
- 定例ミーティングが朝早くでも集まりが良い
- 地域住民とのミーティングがスムーズに進む
- ミーティングがいつでもできる（悪くもあるが…）

- オンラインでの発表会や外部の先生のお話を聞くのが場所を問わずできる。

- 打ち合わせのために移動しなくてよいので楽。
- ミーティングのために移動しなくて良いこと。ギリギリまで他の用事を入れていても、パソコンを持っていればすぐミーティングができる。

- 対面でのミーティングができない中で、オンラインのミーティングによりそれを代替することができた。

Q3



オンラインでない PJ でやりたいことなどはありますか？

- 現地の人との菜園の整備
- 模型作り
- 体を動かすこと
- 図面や資料を囲みながら議論
- 地域住民との町歩き
- 現地調査終わってからみんなで飲みたい

Q4

- 現地に行けないこと、現地の人の生の声を聞けないこと、PJ メンバーと仲良くなるのに時間がかかる。

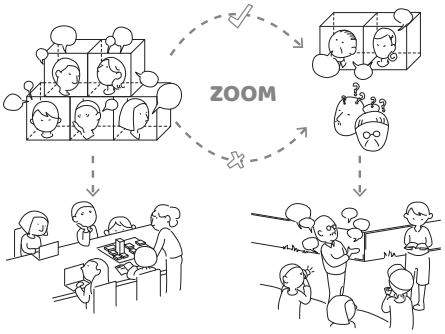
- 実際のフィールドを対象とする以上、調査にしろミーティングにしろオンラインではとても代替し得ないものが大きい。

-PJ ではワークショップなどで自ら労力を払いながら空間の整備を進めることが多く、それはそれで大変なのですが、それがあるから自ら当事者として空間に携わることの覚悟が求められていると思い、そのような場所への想いみたいなものを作っていくのはオンラインでは難しそうだなと思います。
- ミーティングをオンラインで代替すること自体は可能ではあるものの、先輩や地域の方々とのコミュニケーションが足りていなかったり、地域の空間イメージが描けていなかったりという限界を感じた。

- 限界はないが、いろいろ手を出しやすくなっているため、あとで大変になると思う。

- 現場を知らないままの議論は、空論になりがち。
- 議論の密度が低下してしまうこと。
- 現地の人と関わり、まちを整備していくことができない点。

- プロジェクト対象地にはオンラインに対応できない方もいる。普段勉強会に来ていたが、オンラインに移行したことで参加できない人は必ず出てくるので、そこがオンラインの限界だと思う。
また、現地に行ったからわかることは本当に多い。ずっとオンラインで、google street view の情報のみだと難しいと思う。



オンライン PJ の限界は何だと思いますか？

（お忙しい中、アンケートにご協力いただきまして、ありがとうございました！）

COLUMN

BOOK OF THE MONTH

京都と近代
せめぎ合う都市
空間の歴史
中川 理
(2015)

推薦者
M2 沼田

副題にある「せめぎ合う都市空間」とはまさに当時の京都を端的に表していると感じたが、一方で今でもほとんどの都市にせめぎ合いはあるのではないだろうか。せめぎ合いの果ての「折り合い」を如何につけるか、それを考えさせてくれる一冊だと思います。

WEB MAGAZINE

続きは都市デザイン研究室 HP で！
https://ud.y.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/

復興デザインスタジオ

最終課題は「首都直下地震等の複合災害を想定し、事前復興デザインの提案を行い、復興後の空間像を提示する」というものでした。研究室メンバーの提案内容やスタジオの所感をまとめています。（M1 鈴木）

手賀沼 PJ 現地調査！

新メンバーは待ちに待った初の現地調査でした。谷津ミュージアムや手賀沼フィッシングセンターなど、主要スポットを巡りながら手賀沼周辺の魅力を体感した素晴らしい一日について綴っています。（M1 谷本）

LOOKING BACK AT JULY

6th 復興デザインスタジオ最終講評
13,17th 博士課程論文審査
27-28th ジュリー
研究室会議 6th,14th,20th

POSTSCRIPT

都市とは他者であり、研究とは他者との対話である。対話は「説得」となる暴力性を孕んでいる。一方で自分は都市に対する理想を持っており、都市を「説得」したい。研究の暴力性を見つめることが自身の修論と PJ でのテーマだ。（M2 應武）

発行：東京大学都市デザイン研究室マガジン編集部
應武遥香・西野一希・宗野みなみ・河﨑篤史・鈴木直輝・藤本一輝・松坂大和・CHEN Jinyu
発行日：2020 年 7 月 31 日